



キヴォトス少女の調教記録

奴隷No.016 才羽モモイ
奴隷No.017 最羽ミドリ

オーダー:鑑賞品としての2人同時調教

「……んっ……んっ……んっ……んっ……んっ……」

「んっ……んっ……んっ……んっ……んっ……」

とあるパーティ会場の中央、薄暗い空間の中で一点だけ光に照らされたその場所に少女たちは両腕を頭上に掲げる形で拘束されていた。

今日の催しのために着せられたドレスは殆ど素肌が透けてしまっていて、

素肌を隠すどころか寧ろ少女たちの華奢な身体をいやらしく強調してしまっている。



「んっ……んっ……んっ……んっ……んっ……」

少女たちは常に複数人の調教師たちに取り囲まれており、調教師たちは代わる代わる2人の細い身体を嬲り続けていた。

彼らはそれぞれ役割が分担されているらしく、胸を嬲る調教師は胸だけを、下半身を嬲る調教師は下半身だけを徹底的に、

少女の小さな身体が快樂に震えるのをひとつひとつ確かめながら

ねっとり執拗に虐め続けている。

会場の中には何人もの好事家達がいて、
歓談しながらミドリ達が嬲られる様子を楽しんでいた。
薄暗く顔もわからない会場内でなお各々が仮面などで顔を隠していることから、
この場がいかにか非合法かつ邪悪な集まりであるかが窺い知れる。
しばらくして、ミドリに啞えさせられていた口枷が取り外される。



「ぶぐっ……あっ……はっ……」
「……あっ……ひう……や……もうや……いやあ……やめてくださっ……」

ミドリは惚けきった表情で懇願するが、
調教師も好事家達もその様子をニヤニヤと眺めるだけで誰も助けはくれない。

「……いまか……らっ……あっ……ふあっ……や……やあ……やあ……!」
宣言を続けている間も調教師の手は止まりはしない。
それどころか、集まった視線の主たちを楽しませるためか、
より一層ミドリたちへの責めは苛烈になっていった。

「……っ……」
「んっ……んっ……うっ……」



調教師は好事家たちに見せつけるよう少女の敏感な場所をつねり、
弾き、撫で転がして嬲り上げていく。

2人は逃れることのできない快樂に細い身体を震わせながら、
声にならない悲鳴をあげた。

「これはこれは……」

「なるほど今回も良く開発されてますな」

好事家たちが口々にミドリ達を褒め称える。

「これまで幾度となく繰り返された調教の果てに、少女たちの身体は既にあらゆる場所が、快楽に敏感な女の器官として作り替えられてしまっていた。ミドリは快楽から逃れようと必死に身を振るが、調教師たちは少女の弱点を執拗に追いかけて責め続ける。「だめ……っ……あたま真っ白になって……」ひう……むり、むりですこんな……こんなのむりい……」



「続けなさい、早く。それともお仕置きされたいのか？」
調教師が無常な声で宣言の続きを催促する。
殆ど絶頂寸前で限界に近いミドリの状態など気にしてもいない。

「……うあ……っ……は、はひ……っ、っづけます……っ……。
続けますから……お仕置きだけは……っ……ひうっ……！」
ミドリはカタカタと齒を震わせながら続く言葉を口に始める。

「いまか……らっ……ッ！……みなさんには……」

ミドリは快楽に悶えながら必死で教えられた言葉を思い出す。調教師の指がジヨリジヨリと敏感な箇所を擦りあげるたびに無理矢理引き出される快楽にすべてを忘れそうになるが、それでもなんとか歯を食いしばって言葉を絞り出そうとした。



「……っ……っ……わたし……わたしたちが……
どれだけ開発されていて……いろんな道具で……っ
……ちゃんと絶頂でき……できるかをっ……ご覧いただきましゅ……。
お尻の穴や、によ……尿道でも……
ちゃんと絶頂できるようになりましたので……っ
是非ご覧に……」覧になって楽しんでいっただしや……あうっ……！」

言い終えると同時にミドリはぶるぶると震えて絶頂をむかえた。その隣ではモモイも同じく調教師たちの手で絶頂へと追い込まれている。

「……あ……うあ……っ……はっ……」
「んう……ん……んう……」

少女たちが絶頂の余韻に身体をふるふると震わせている間にも調教ショーの準備は着々と進められていく。ジャラジャラと鎖が音を立てて少女たちの片足がそれぞれ宙に吊り上げられ、彼女たちのすでにどろどろに溶け切った幼い秘裂があらわになった。



「ひう……や……やあ……」
「ん……んう……」

恐怖に怯える2人にみせつけるかのように、これから使われる調教器具がひとつまたひとつと取り出され、近くの台に並べられていく。

やがて準備が整ったのか
調教師たちがいくつかの道具を手にしてミドリたちの周りを再び取り囲んだ。
視界に入るのはどう考えても少女の華奢な身体には負担の大きすぎる無骨な道具たち。
だが、ミドリは、これが間違いなくこれから自分たちに使われ、
そしてそこに容赦は一切ないのだと知っていた。

「ひっ……やっ……」

「んっ……んっ……」



「……や……やだ……それいや……いやです……やめてくださ……」

ミドリは何度目かの無意味な懇願を口にするが、
当然そんな言葉は誰も聞いてはいなかった。

少女たちの意思と尊厳を無視した地獄の調教ショーが幕をあける……

「ひあっ……あうっ……!! だめ、赦して、赦してください……っっっ!!」

調教師は無言でデイルドを動かし続ける。
やがてデイルドが奥に突き当たりそれ以上進まなくなったのを確かめると、そのままゆっくりとした動きでデイルドを抜き差しし始めた。
じゅぶじゅぶと音をたててデイルドが少女の膣肉を抉り、こそぎ、引っ掻き回していく。



「ひうう……ひっ……あぐっ……うあっ……っっっ……!!」
「んうう……!!……んうう……!!……ん……!!」

ミドリたちはひと突きごとにGスポットを削られ、

ポルチオを無遠慮に押しつぶされる抵抗できない快樂に腰を跳ねさせる。

入っては出し、出しては入れることに襲いくる到底耐えられるはずの快樂の波……

少女の身体はすぐに限界を迎え、

幾度となくびくびくと身体を跳ねさせながら絶頂を迎えた。

「みなさんにどうなっているのか説明しなさい」
絶頂に身を震わせるミドリたちに、
調教師は追い打ちをかけるような非情な命令を言いつける。
「あつ、あつ、無理、無理れす……こんや……ひうつー」
「できないならこれが終わったら懲罰房行きだな」
懲罰房とという言葉が出た瞬間、少女たちの身体がビクツと跳ねた。
「ひつ、やつ……ッあ……します、せつめいしましゅから……」
あそこはもうや、やあ……れす……ッ！」



「はやくしなさい」

「ひうつ……いま、わた、わたしのお、おまんこ……に、
太いの入れて頂いてしゅぶしゅぶしていただいています……っ、
ふといの、入れられるたびに奥がごりっとして、
おまんこのうらがわジョリジョリされて、
それがずっと何回も、何回も、あつ、あつ、そこだめ、だめです、だめ……ッ」

ミドリとモモイはビクビクと腰を跳ねさせながら同時に絶頂を迎える。
その様子を見ながら調教師たちは次の道具に手を伸ばす。

「次は尻穴の感度を見ていいただかかないとな」

調教師が淡々と言い放つと同時に、少女の菊門にアナルディルドがあてがわれた。冷たい感触。ミドリは反射的に尻穴をすぼめるが、そんな抵抗には何の意味もない。つぶり、つぷりとひとつずつ、

ディルドの玉のようなうねりが尻穴の内側へと沈んでいく。



「いっ……あ……！……！……やっ……やめてえ……」

膣や乳首への責めは当然のように継続されており、ミドリはもう息も絶え絶えになってしまっていた。

だが調教師はそんなことはおかまいなしに、ぐりぐりと捻るような動きでアナルディルドの抽送を開始し、少女の尻穴と腸壁を責め始める。

「みなさんにわかるよう説明しなさい」

「あ……あ……」

調教師の命令にミドリは絶望したような表情でしばらく口をばくばくとさせていたが、やがて泣きながら口を開く。



「あうう……おし、お尻の穴に……アナルデイルドをいれていただいています……
玉が一個はいるたびに、おし、おしりの穴がきゅってして、変な感じ……ひぎゅっ」

「だめ……だめ……おまんこ虐めながらお尻いじらないでください……」

「あたままっしろになってわけがわかんや……あひっ……ひやつ……ひやつ……」

「んうう……んっ……んうううううううううう……」

アナルデイルドを引き抜く瞬間、2人はくぐもった悲鳴をあげながら絶頂を迎えた。

「今回も大した仕上がりですな。奉仕的なことも仕込まれるおつもりで？」
シヨーを楽しんでいた好事家が調教師に話しかける。

「いえいえ、この子たちは装飾品としてのオーダーを受けておりますからね。
奉仕的なことは最低限に、責めに対する反応だけを仕込んでいるのですよ」
調教師が笑顔で対応する。

次の依頼主になるかもしれないのだから大切なお客様だ。
「今は尿道でも快楽を感じられるよう仕込んでいるところです」



調教師は棘のたくさんついた歪な形状の細い尿道用デイルドを取り出し
好事家にその使い方を説明しはじめる。

好事家は感心したように頷くが、
ミドリはそれを見るとガタガタと震えながら恐怖に表情を引き攣らせた。

「ひあっ……それ……それだけはやめてくださ……ひぐっ……っ……ッ……！」

だが懇願も虚しく、

調教師はそれを2人の尿道にあてがい、くりくりと尿道を刺激しはじめる……。

「うあ……うんん……うぎっしー」
「ぶぐう……んんっ、んっ……!!」

尿道を無理矢理ほじくられる異様な感覚。
本来異物を受け入れることなど絶対にならないその場所に、
くちゆくちゆと音を立てながら細いディルドが入り込んでくる。



「ほら、どうした。ちゃんとどうなっているのか説明しなさい」

「い……あ……あ……ひっ……」

調教師が説明を求めるが、

ミドリはもう喋ることすら難しい状態に追い込まれていた。

膣やアナルから絶えず襲い来る快樂に加えて尿道への異様な刺激。

ほんの一ミリでも尿道ディルドが動いたたびに、

ミドリの下半身を鋭い痛みと

調教によって開発されたおぞましい快樂が走り抜ける。

ミドリは懲罰房に入れられたくない一心で必死の思いで言葉をひねり出す。
もういちどあそこに入れられたら、もう人間ではいられなくなってしまう。
ミドリは恐怖にガクガクと震えながら、なんとかして説明を始めようと口を開く。

「いいま……いいましゅ……い、いま……わたしは……」

おまんこしゅぶしゅぶされながら……っ

おしりずぼずぼされて、によ、によっども、くちゅくちゅ、

くちゅくちゅって……虐めていただいています……っ……あっ……」



「おっぱいも……ずっとコリコリされて……」

も、もう全部気持ちよくてわかんや……なんにもわかんや……ひう……」

少女はもう自分が何を言っているかも理解していない。

前後不覚に陥ってしまったミドリは、

ただ快樂に流されるままに教え込まれた言葉を口にしていく。

もう何度目かも分からない絶頂に少女たちは細い身体をびくびくと震わせるが、調教師がその手を緩める様子は一向にない。

ミドリは懲罰房に入れられたくない一心で必死の思いで言葉をひねり出す。
もういちどあそこに入れられたら、もう人間ではいられなくなってしまう。
ミドリは恐怖にガクガクと震えながら、なんとかして説明を始めようと口を開く。

「いまま……いまましゅ……い、いま……わたしは……」

おまんこしゅぶしゅぶされながら……っ

おしりずぼずぼされて、によ、によっども、くちゅくちゅ、

くちゅくちゅって……虐めていただいています……っ……あっ……！



「おっぱいも……ずっとコリコリされて……」

も、もう全部気持ちよくてわかんや……なにもわかんや……ひう……！

少女はもう自分が何を言っているかも理解していない。

前後不覚に陥ってしまったミドリは、

ただ快樂に流されるままに教え込まれた言葉を口にしていく。

もう何度目かも分からない絶頂に少女たちは細い身体をびくびくと震わせるが、調教師がその手を緩める様子は一向にない。

その後少女たちは何度も絶頂し、
なんども気絶するほどに責めたてられることになる。
気絶する度に調教師は鞭で彼女たちを叩き起こし、
叩き起こされる度にミドリは感謝の言葉を述べさせられた。

既に観客達は誰一人として少女たちに興味を示していなかったが、
お披露目会が終幕を迎えるまでは
この地獄のような調教師たちの責めは終わることはない……。





調教は続く……



















